

盲ろう者向け IT 講習会

一般社団法人 愛知県聴覚障害者協会

〒460-0001 愛知県名古屋市中区三の丸 1-7-2 桜華会館 1 階

助成事業の概要

・目的：盲ろう者のコミュニケーションの幅をひろげ、情報摂取を円滑にすることを目的とした。とりわけ、大きな災害発生時、盲ろう者が一人でも、自身で周囲と連絡が取り、避難情報などを集め、その障害を持ってしても生き延びてほしいという願いも込められている。また、盲ろう者が利用する IT 機器は特殊で専門的な物の為、IT 活用を促進させるため、IT 支援者の育成も行った。

・時期：平成 29 年 5 月 22 日（月）～平成 30 年 3 月 26 日（月）

・盲ろう受講者：4 名 支援者受講者：2 名

・のべ講習時間：盲ろう者… 156 時間、支援者…24 時間

・講習形式：盲ろう者…マンツーマン、支援者…マンツーマン及び講師 1 対受講者 2

・講習内容…盲ろう者向けパソコンソフト（拡大・色変換など視覚支援および点字キー入力）および点字ディスプレイでの基本的操作、文章入力、メール、インターネット検索の学習。

事業の成果

<盲ろう者講習>

受講者全員、障害の程度が異なり、それによりコミュニケーション方法・能力も異なるため、同じ時間内で複数の受講者に講習を行うと理解にばらつきが出てしまう。マンツーマン形式を取ったことで、理解を確認しながら行えたため、受講者が自分のペースで安心して受講してもらえた。そのことで、すべての受講者に盲ろう者であっても IT は活用できることを理解してもらい、積極的に学んでもらえた。

●2 名の例

・重度障害の A さんの場合

軽度の弱視であった時はパソコン画面を目で見て操作ができていた。しかし、障害が進み、現在はほぼ全盲全ろう。画面を見ての操作は不可能なため、点字ディスプレイの受講となった。コミュニケーションは手話を触って、話を認識する方法で、時間がかかるが、1 回 1 回の講習をゆっくり行い学びを深めていった。現在では、メールがスムーズに送受信できるようになり、また、これまで支援者にお願いしていた電車・バスの時刻を調べることも自分でできるようになった。見えていた時にできていたことが、またできるようになった。

・障害が進行中の B さんの場合

まだ視力は保たれているが、最近、障害の進行が著しいため、パソコンと点字ディスプレイの両方を受講した。パソコンでは、まぶしさには色を反転で、視野狭窄には画面を拡大、マウスポインタの色の変更などを行うことで格段と操作がスムーズになった。残存視力でまだ十分パソコン活

用ができることがわかり、意欲的になってもらえた。また、点字ディスプレイも受講され、今後障害が進行しても、他者との連絡、情報取得できることを実感し、とても安心されていた。

<支援者者講習>

支援者2名が受講し、その後、それぞれの支援活動の中で、ITのサポートを行っている。特に全く見えない盲ろう者は誤操作によるトラブルが多く、自分で解決ができないときに支援者のサポートが功を奏している。盲ろう者が利用するパソコン機器・ソフトは専門性が高く、トラブル復旧も盲ろう者には困難な場合が多い。そのため、このような支援体制は非常に重要である。

成果の広報・公表

当センター機関誌「センターだより」2018年2月号より

当センターでは盲ろう者（目と耳の重複障害者）に対してパソコンなどの機器の講習を行っています。「盲ろうでもパソコンが使えるの？」と思われる方も多いと思いますが、盲ろう者それぞれの見え方、聞こえ方に合わせた機器やソフトを使うことで可能になります。

この講習のねらいは、盲ろう者が一人でも、家族・友人などと連絡を取り合ったり、自分で情報を集められるようにすること。また、いつ起こるかかわからない震災に備えて、災害時に助けを求めたり、被災の状況を把握できるようにすることで、生き延びてほしいという願いもあります。

多くの盲ろう者が、コミュニケーションの幅が広がり、社会参加が充実されるよう、ITを学んでいただけたらと思います。

今後の展開

盲ろう者がITを活用することは、日常生活をゆたかにするだけでなく、有事の時は命綱ともなる。盲ろう者がITを学ぶことはかけがえのない時間となる。

このような重要な時間に行政からの予算が出ないため、十分な学習環境が整備できずにいたが、今回の事業で、実際に1年を通して行ったことで、受講者のニーズ、経費なども明確となった。

今後はこの前例を持って、行政へ予算化を要望し、多様で個別性のある盲ろう者にひとりひとりにとって学びやすい環境整備していく。

県内在住盲ろう者は約1,000人と推定されている。その大半は「目も耳も不自由でIT活用は無理」、「自分とは関係ないこと」と考えている。しかし、今回の事業で、障害の進行であきらめていたITスキルを取り戻した人も、自分のできることを新たに増やした人もいた。今後、1人でも2人でも盲ろう者がIT活用で自立と社会参加を実現してほしいと切に願う。